

# 方向

第一五七号 一九九三年六月三〇日 京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内 方向 社

意 案 田 一 法華經巡礼 八四一 1993 06 01 原 田 憲 雄

06-13. さて、また世尊は、さらに比丘衆一切に呼びかけられた――

*atha khalu bhagavan punar eva sarvāṅgāṃ dhīkṣu-saṃghaṃ amantṛayate sma /*

06-14. 比丘たちよ、わたしはあなたがたに告げて、知らせよう。このわたしの弟子の大徳マハーマウドガリヤーヤナは、二万八千の仏たちを喜ばせ、その仏世尊たちにさまざまに恭敬し、師事し、尊敬し、供養し、崇拜するだろう。またその仏世尊の涅槃のときに、金・銀・瑠璃・玻璃・赤真珠・碼瑙・琥珀の七宝造りの塔を建て、高さ千ヨージュナ、周囲は五百ヨージュナ。そしてその塔に、花・薫香・香水・花冠・塗香・抹香・上衣・日傘・幢・幡・旗でさまざまに供養するだろう。その後さらに、かれは二千万億の仏たちに同じように恭敬し、師事し、尊敬し、供養し、崇拜するだろう。最後の化身で「多摩羅跋梅檀香」と名づける如来・尊敬されるべき・正しく覚ったひと、としてこの世に現われ、知と行を完成し、スガタであり、世間を知り、無上のひとであり、訓練されるべき人々の調御者であり、天神と人間との教師であり、仏であり、世尊であるだろう。またその仏国土は「意案」と名づけられ、たいへん清浄で、平らで、魅力的で、端正で、見晴らしがよく、玻璃の地は宝樹で莊嚴され、花がまき散らされ、多くの人間や天神で満ちてい



て、声聞や菩薩という幾百千もの聖仙が楽しんでゐる。その仏寿は二十四中劫、正法は四十中劫のあいだ  
持続し、像法もまた四十中劫のあいだ持続するだろう。

ārocayāmi vā (W:vo) bhikṣavāḥ prativedayāmi / ayam mama śrāvakaḥ sthaviro mahāmaudgalyāyano  
śtāvimpāti-buddha-sahasrāṇy āgāyisyati teṣāṃ ca buddhānāṃ bhagavatāṃ vividhāṃ sat-kāraṃ ka-  
risyati guru-kāraṃ mānanāṃ pūjanāṃ arcanaṃ apacāyanāṃ karisyati / pariniṣṭhānāṃ ca teṣāṃ bud-  
dhānāṃ bhagavatāṃ stūpān kārayisyati sapta-ratna-mayān / tad-yathā suvarṇasya rūpyasya vaidūr-  
yasya sphatikasya lohitaṃkṭer aśmagarbhasya musāragalvasya / yojana-sahasraṃ samucchrayeṇa  
pañca-yojana-śatāni pariṇāhena / teṣāṃ ca stūpānāṃ vijāṃ karisyati puṣpa-dhūpa-gandha-  
mālya-vilepana-cūṭṇa-cīvara-cchatra-dhvaṅga-patākā-vaijayantīdhīḥ / tataś ca bhūyaḥ pareṇa par-  
atāreṇa viṃśater buddha-kotī-śata-sahasrāṇāṃ evaṃ-rūpaṃ eva satkāraṃ karisyati guru-kāraṃ mān-  
anāṃ pūjanāṃ arcanaṃ apacāyanāṃ karisyati / paścime c'ātmabhāva-pratīlamdhe tamālapatracandan-  
agandho nāma tathāgato 'rhan samyak-sambuddho loka bhavisyati vidyā-carana-sampannah sugato 1-  
oka-vid anuttarāḥ puruṣa-damya-sārathīḥ śāstā devānāṃ ca manusyanāṃ ca buddho bhagavān / mano-  
'dhirāmaṃ ca nāmāsya tad-buddha-kṣetraṃ bhavisyati/ratiprapūrṇaś ca nāma sa kalpo bhavisyati /  
parisūddhaṃ cāsya tad-buddha-kṣetraṃ bhavisyati samam ramanīyaṃ prāsādikam sudarśnīyaṃ sphati-  
ka-mayam ratna-vrksābhivicitritam mukta-kusmābhikīrṇam bahu-nara-deva-pratipūrṇam ṛṣi-śata-s-

ahastra-nisevitam yad uta śrāvakaś ca bodhisattvais ca / caturvīṣṭatim cāśyāntara-kalpān āyuṣ-  
pramaṇam bhaviṣyati / catvāriṣṭac cāntara-kalpān saddharmaḥ sthāstati / catvāriṣṭad evāntara-  
kalpān saddharma-pratirūpakah sthāsyati ||

06-15. 又て、世尊は、そのとき、次の偈を説かれた。

atha khalu bhagavāms tasyām velayān imā gāthā abhāsata ||

06-16. マウドガリヤ姓の、このわたしの弟子は、人間としての生存を捨て、

二万の救世者なるヅナ、ほかに八千の汚れなき者に、出会うだろう。(三〇)

そこで梵行を修めるだろう、その仏の智慧をもとめて。

そのとき両足の最高者、導師たちに、さまざまに恭敬するだろう。(三一)

かれらの広大最勝の妙法を、幾千万億カルパのあいだ保ち、

塔に対して供養するだろう、それらスガタが涅槃に入られたとき。(三二)

勝利の旗のある宝玉の塔を建てるだろう、それら最高のヅナのために、

花や香や音楽を供養するだろう、世間に好意をもち共感する方がたのために。(三三)

かれは最後の化身で、うるわしいあの意楽国で、

多摩羅跋耨檀香という名の、世間に好意をもち共感する人となるだろう。(三四)

満二十四中劫であろう、そのスガタの寿命の長さは、



かれはこの仏の眼目を説き明かすだろう、人間に天神に、つねに。(三五)

そのジナには、ガンジス河の砂のように幾千万億もの多数の声聞がいて、

六神通と三明をそなえた大神通力者であり、スガタの教誠で神通に達したのだ。(三六)

また、不退転の多数の菩薩がいて、つねに勇猛精進し、正しい智慧をもち、

スガタの教誠に専念し、その数は幾千もの多数であろう。(三七)

そのジナが涅槃するとき、正法はとどまるだろう、

二十と二十中劫の満ちる間。像法もまた、おなじ長さであろう。(三八)

大神通力のこの五人の声聞は、わたしが指示したのだ、かれらが無上道に向かい、

未来の世に、みづからジナとなるだろう、と。かれらの行ないを、お聞きなさい、わたしから。(三九)

maṅḍalya-golro mama śrāvako 'yaṃ jahitva māṇṣyakam ātmabhāvam /

viṃśat sahasrāṇi jināna tāyinām anya (W: anyāś) ca astau virajāna drakṣyati || 30||

carisyate tatra ca brahma-caryam bauddham imaṃ jināna gavesamāṇaḥ /

satkāru teṣāṃ dvi-padottamaṇāṃ vividhaṃ tadā kāñi (W: kāñiti) vināyakānāṃ (W: nāyakānām) || 31||

saddharṃṃ teṣāṃ vipulaṃ pranītaṃ dhāretva kalpāna sahasra-kotyaḥ /

pujāṃ ca stūpeṣu karisyate tadā parinirvrtānāṃ sugatāna teṣāṃ || 32||

ratnā-mayān stūpa savaijyantān karisyate teṣa jinottamaṇāṃ /



puṣpehi Gandhehi ca pūjeyanto vādyeṇi vā loka-hitānukampinām || 33||  
 tat paścime caiga (W:caive) samucchrayasmin priya-darśane tetra manoḥja-kṣetre /  
 dhaviṣyate loka-hitānukampī tamālapatraccandanaganandha-nāmnā || 34||  
 catuvimśa-pūrnāntara-kalpa tasya āyus-pramāṇam sugatasya dheṣyati /  
 prakāśayantasy'ima buddha-netrīmanuṣesu deveṣu ca nitya-kālam || 35||  
 bahu-śrāvakās tasya jinasya tatra koṭī-sahasra yatha gaṅga-vālikāḥ /  
 sad-abhiḥṇa traividyā-maha-rddhikās ca abhiḥṇa-prāptāḥ sugatasyasane || 36||  
 avaiartikās ca (W:co) bahu-bodhisattvā ārabdha-vīrāḥ sata (W:sada) samprajānāḥ /  
 abhiyukta-rūpāḥ sugatasya śāsane teṣāṃ sahasrāṇi bahūni tatra || 37||  
 parinirvṛtasyāpi jinasya tasya saddhermu samsthāyati tasmi kāle /  
 vimśac caviṣṇāntara-kalpa pūruṇā etat-pramaṇam pratirūpakasya || 38||  
 maha-rddhikāḥ pañca mi śrāvakā ye (W:ne) nirdiṣṭa ye te maya agra-bodhaye /  
 anāgate dhvāni jinā svayam-dhuvās teṣāṃ ca carya śrūthā mamāntikā || 39||

06-17. 以上が、聖なる「妙法蓮華」といふ法門の授記品第十。

ity ārya-saddharmaṇḍarīke dharmā-peryāye vyākaraṇa-parivarto nama śaṣṭhaḥ ||

これで授記品を終わり、次回は正本の「往古品(おうこほん)」妙本の「化城喻品(けじょうゆほん)」である。



西翔羽箭山桑弓  
 仰天射落衝蘆雉  
 麻衣黑肥衝北風  
 帶酒日晚歌田中  
 男兒屈志窮心不窮  
 枯榮不平等噴天公  
 寒風又變又爲春柳  
 條條看卽煙濤濤

山本のぶを刻（一九八二・一）

李賀

野

歌

野っばらで歌う

カラスの羽の矢 ヤマグワの弓

天を仰いで射落とした 芦をくわえるオオトリを

麻のきものは垢じみたって 北風ついて

酒の気おびて 日暮れ 田んぼで歌うんだ

男だ たとえ身は窮しても 心は屈せぬ

栄枯盛衰不平等 天のおやじに怒鳴りはすれど

寒風すさぶこの季節 やがて変じて春柳

枝えだに 見たまえ みどりの煙もうもう

『夢我集』では題を「野にて歌へる」とし文語で訳しているが、上品すぎて、ひ弱い。このたび改訳した。いくらか原文の調子に近づいただろうか。

(1993 06 20 原田憲雄)

「漁師の唄」の張志和は日本ではあまり知られていない人でしたが、今回とりあげる韋應物は『唐詩選』に、「秋の夜 丘二十二員外に寄す」と題する、

懷君屬秋夜

きみがしのばれる 秋の夜

散步詠涼天

散歩しつつ詩をくちずさむ 涼しい空のもと

山空松子落

山では人のけわいなく 松かさが ほとり落ち

幽人亦未眠

ひっそりとあなたは まだ眠らずにいるだろうか

や、「柳郎中が〈春日揚州に帰らんとして南郭にて別れらる〉の作に、酬ゆ」、

広陵三月花正開

広陵は三月 花はまさに盛りであろう

花裏逢君醉一廻

花のもとで君に逢い もういちど酔いたいもの

南北相過殊不遠

大江の南北とはいえ 訪問しあうにそう遠くない

暮潮帰去早潮来

夕潮が帰ったら もう朝潮が来ているのだ

などが選ばれて有名な詩人です。とはいえ生卒年も、字もわからないのですが、

「調嘯詞」と「三臺詞」をそれ

まず、作品を。



胡この馬ま

〔唐〕韋應物

調嘯詞

胡の馬よ

胡馬。

胡の馬よ

胡馬。

とおく燕支えんじの山やまべに放たれ

遠放燕支山下。

砂すなをふみ 雪ゆきをふみ ひとりいななき

跑沙跑雪獨嘶。

東あづまを望のぞみ 西にしのぞみ 迷まよう路ぢ

東望西望路迷。

路ぢに迷まよい

迷路。

路ぢに迷まよい

迷路。

辺境へんけいの草くさはてしなく 日ひは暮くれれてゆく

邊草無窮日暮。

調嘯詞は、古調笑・宮中調笑・転応曲・調笑令などの別名があり、「胡の馬」のように全部で三十二字、馬・

下・路・暮のように四個の仄韻の文字で韻をふみ、胡馬・胡馬と迷路・迷路のように同じ文字で韻を疊む「疊韻」が二回あり、嘶と迷のように平韻の文字で韻をふむ句を二つ含み、第五句末の路迷と第六・七句の迷路がそうであるように転倒して対応している、というのが定格です。のちに変化し、双調のものも出、「調笑令」といえばふつう双調のものを指します。調嘯・調笑いずれも、もとは「あざわらう」とか「ふざける」というほどの意味



でした。これが詩詞の文体の名となったのは唐代にはいつてかららしいのですが、この文体の詩詞はいずれも内容としてはまじめなものばかりで、あざわらったりふざけたりしたものはありません。路迷と迷路のように転倒するところが、音調・形式のうえで、奇抜あるいは滑稽、と受け取られ、その奇抜ないし滑稽を（調嘯・調笑）といったのかもしれませんが。中唐の詩人李賀にも「苦筆調嘯引」という作があり、拙著『李賀論考』で、これらの問題も考えているので、ご参照ください。

「胡の馬」に返りましょう。胡とは、ご存知のように、漢民族が異民族をさした呼称で、異民族のなかでも西北のものを主とし、「胡の馬」といえば中央アジア産の馬をさします。血のように赤い汗を流し一日に千里を走るといわれ、漢の武帝がこの馬を手に入れるために張騫を西域に遣わしたことは有名です。いらい胡馬は中国の軍隊の胡族との戦いでも使われました。ただ、戦いで傷つくと名馬でも手足まといになるので、その場で捨てられます。「燕支」は「焉支」とも表記し、いまの甘肅省の張掖・酒泉の界に祁連山と並び東西二百余里、南北百里の山脈で、臙脂を産したといわれます。このあたりは古くからの漢民族と異民族の衝突する戦場として有名でしたから、ここにさまざまよう傷ついて捨てられた胡馬は少なくなかったのでしょう。

韋應物は、南北朝のなから北朝での名家といわれた韋氏の人で、八世紀の前半に長安で生まれ、若いころ太学に在籍したこともありますが、学問などやる気はなく、まもなく玄宗皇帝の護衛武官となり、皇帝に愛され、任侠無頼で鳴らしたものです。ところが七五六年、安祿山の変で玄宗が蜀に逃げたのち、職を失って落ちぶれ、はじめて心を入れかえて勉強し、文官として再出発しました。十年のち洛陽県丞となりますが、宦官や軍隊

の横暴を摘発し、かえって告訴されて辞職し、のちに内外の官を経て、江州や蘇州の刺史しとなりました。それでかれのことを「章江州」とか「章蘇州」と呼ぶのです。九世紀の前半、かれの九十歳のころ太僕少卿兼御史中丞たいぼくしょうけいけんごじちゅうじやうで諸道塩鉄しよどうえんてつ運江淮こうわいりゅうこ留後になった、という伝えがあります。九十歳で現職の官吏というのは、ほとんど例がなく、また九世紀に入って以後のものとするべきかれの作品がのこっていないようなので、これはあまり信じられません。「胡の馬」が、いつ作られたのかわかりませんが、安祿山の変の後、おちぶれて放浪したころのものとする、この詞の悲痛な響きも、よく理解できません。

白居易が、韋應物の五言詩を批評して「高遠雅淡」といったので、かれの作品全体がそういう方向で見られがちですが、「夏花明」

夏条緑已密

夏ノ木ハ 緑 ビッシリ

朱萼綴明鮮

点綴テンアヱスル 朱萼シユガクノ 鮮明

炎炎日正午

炎炎 正午ノ 太陽ニ

灼灼火俱燃

カッタ イッセイニ 燃エアガル 火トナツテ

翻風適自乱

ソヨグ風ニ ヒルガエリ 吹キミダレ

照水復成妍

川水ニ照リ映エ ナントイウ 妍ズキヤカサ

掃視窗間字

掃ッテキテ 窓ノ文字ヲ 視ヨウトスルト

荧煌满眼前

キラキラ 眼前ニ 満チアフレル



のように、激しく、エネルギーな風景をとりあげた作品があり、これは陽性残像をうたった詩として、たぶん世界の文学史で、もっとも早く、めずらしい詩であろう、と思います。

李白や杜甫よりはひと世代若く、一見「雅淡」であるため、陰にかくれたように、もてはやされず、研究者もあまりなかったのですが、ちかごろようやく、専論がでるようになりました。単純な詩人ではなく、これからの真価があらわれてくる詩人でしょう。早くから愛読してきた者には嬉しいことです。調嘯詞のいま一つは、

天あまの川がは

〔唐〕章應物

調嘯詞

天の川

河漢

天の川

河漢

暁の秋の町空に　ながながかかる

暁挂秋城漫漫

ひとはながめて思うのです

愁人起望相思

江南と　さいはての北への　別離

江南塞北別離

離別

離別

離別

離別

天の川は同じだけれど　路はへだたる

河漢雖同路絶

夜

穴工

1993 05 21

原

田

慶

出てみると

無限に青く澄んだ

ガラス玉のような夜だった

白い雲は筋を引いて西へ行き

月はもう空の真中を過ぎ

路地の奥からジュウシマツの

さわいでいる声が聞こえる

目を凝らすといくつもの

星がまたたいていた

空のむこうはあんなに明るいのに

木々は黒ぐろとして

赤いザクロの花さえ見分けがつかない

むかし子どもだった頃



重たいほどに星の光る夜

天の川は白く溶け

じっと見上げていると

空がすべるように動き出して

わたしは後ろへころんだ

夜の香とその冷たさと

星はあふれて

地に降りてくるように見えた

わたしは急いで家に入り

暗い土間で妹たちと

歌いながら踊った

「おまえ達の歌う時がいちばん楽しい」

と言って母は竈の火をかきたてた

あんなにもわたし達の近くにいた星は

どこへ行ったのだろうか

たれもいなくなった家で母はひとり歌い

遠いむかしを思い出そうとして

わたしは星をさがす

空には風があるらしくて

ぬぐうように雲が切れ

北斗七星が小さく光り出した

## 縁

日

1933 06 19

原 田 慶

毎月二十五日は天神さんの縁日である。忘れていることも多いのだけれど、五月には行ってみた。買いたい物がなくても、家から近いので思いついたときには見物に出かける。おもしろいのは骨董品を見たり、それを買っている人の様子を眺めたりすることである。首のとれたお雛さんやまっすぐ立たない市松人形などもあり、さんごの髪かざりや何かわからない美しい玉などこまごました物が並んでいる。古い火鉢に高い値段がついているので、うちの縁の下に並んでいるものどどこが違うのだろうかと思ったりする。火鉢でも銭形平次のおかみさんが傍に座っているような昇火鉢ならおもしろいが、今はそういう物は縁日などに出て来ない。人がよく買っている



のはガラスの品である。水差しなど手にとって透かして見ながらとても欲しそうにしている。「それ、ええやろ」などと店の人が言うけれど、欲しそうにすると高い値段をつけられるのかもしれない。以前、小さな足つきの皿のようなのを負けてもらって買った人が、四時間もねばったと言っているのを聞いた。よほどよい品物だったらしいが、買った人は言葉つきからして関西の人ではなかった。最近はそのほどのよい品物が縁日に出ているようにも思えないし、客のほうでもそんなに熱心な人も少ないような感じがする。

昔は文化財などに対する知識や情報もなかったせいも、いろいろな物が縁日にも並んだらしくて、清滝の愛宕念仏寺が無住になって荒れていたのを、そこに入って修復された西村公朝師が話されたのを聞いたときであるが、「あなたのお寺のお地藏さんらしいのが縁日に出ました」と知らせてくれる人があり、さっそく行ってみると確かにそうだった。買いとって、地藏堂もお地藏さんも修理してお祀りしたが、ご縁というものは不思議なもので、たれかに売りとばされて行く方知れずになっていたお地藏さんが、ちゃんともとに戻ってくださるのだから有難い、とおっしゃっていた。今は、そんな大切な物がいちど外へ出たら、まず返ってくることはないのではないだろうか。

古い物を見てみると、それを使っていた人の生活が想像できて、おもしろくもあり、気味わるくもある。どう思ふかはかっただけけれど、先日も詩仙堂の前の民芸館へ古丹波を見に行つて、一時間ほども中にいたが、そのあいだに一人のひとも出入りせず、古い建物を改造したところで、窓の外は竹林だし、静まり返っていて、その二階にみごとな室町、桃山、江戸などの大壺が並んでいた。他にも古い道具類がたくさん集められていたが、たっ



た一人であるようなところにいるとだんだん現実はなれがして心細くなってくる。縁日では大勢の人がいるからそういうことはないはずだけれど、手垢のついた古い物というのは妙に寂しい感じのするものである。

縁日といっても、落語にあるようなおもしろいやりとりはめったに聞けるものではなく、たいいていの人が黙ってぞろぞろ歩いている。こうして眺めながら歩きまわるのが縁日というものの楽しみである。三十年くらい前には、天神さんの境内は今出川通りを越えて下の森（しものもり）までひろがっていて、今の倍くらいの広さがあった。その草原の上にゴザを敷いて、古本屋がたくさん出ていた。夕食をすませてから、古本を見にゆく人の後についてわたしもよく出かけた。寒くて雪になりそうな夜でも、はだか電球をぶらさげた広場に本を並べて、根気よく客を待っている店がいくつもあった。本は、背が見えるように伏せて並べてあり、その本を手につかめるだけ引き抜いて背を読む、興味のあるのを取り出して中を調べ、買う本を横に出しておく。それを繰り返してどの本屋も見えて歩くのである。何軒もの古本屋が店を出しているから、ずいぶん時間がかかる。わたしは寒くなって早く帰りたいのをがまんしながら待っていた。縁日でなくとも夕涼みなどで古本屋へ出かけて買い集めた本も多く、今になってそれが役に立つことになった。わたしが知りたいくらいのことは、家において、本棚でほこりをかぶっているもので間にあうからである。

もう二十数年になるだろうか。下の森に西陣警察署とその宿舍などが建って境内が狭くなった。縁日の出店は、警察の外側の道路や、境内のまわりの道路にはみ出してしまっている。古本屋は警察の西のブロックに張りつくように三店くらい出るが、ならばのはほとんどマンガやコミックだけ。骨董屋は境内のまわりの道路。そして境



内の西半分は植木や種苗の店、東半分は衣料やゲームの店、中央の参道に沿って雑貨、金物、おもちゃ、金魚すくい、いろいろな食べ物屋が並ぶ。おこのみ焼き、たこ焼き、焼きとうもろこし、リンゴ飴、どんぐり飴、豆菓子、こぼれうめ。フランクフルト、たい焼き、カルメラ焼き、かき氷、甘酒などが、季節によって少しずつ変わりながら出る主なものである。綿菓子もうめったに見なくなったし、飴細工などは十年以上も前に姿を消した。この参道は、初天神やしまい天神には、動けないほどいっぱいになるが、あいだの縁日はすいている。長五郎（ちよんごろもち）という餅菓子に特別に楼門の中で茶店を出していて、これは豊臣秀吉が天正十五年十月に北野大茶会を催したとき、河内屋長五郎という人が店を出し、秀吉の目にとまって長五郎餅と名づけてもらったものだそうである。

今では縁日に子どもの姿をほとんど見ないが、昭和の初め頃には、縁日と言えば子どもには楽しいところで、のぞきからくりや、ろくろく首などの見世物もあり、あちこち見て歩いているとじきに日が暮れるというようなことだったらしい。わが家の主人は、子どもの頃にほくろが多くて、よくガマの油売りにつかまったそうである。例の「たらありたらありと油汗を流す……」という口上がおもしろくて聞き入っていると、「ぼん、ちょっとおいで。ぼんはようけほくろがあるな、ひとつおっさんが、そのほくろ取ってやろ、このほくろを取るんやぞ」と言ってガマの油をつけ紙を張りつける。しばらくたつと「どや、とれたやろ、これがあんたのほくろや」といって紙をはがしそこについている胡麻粒のようなものを見物にみせ、「どや、とれたやろ」と聞く。たくさんあるのでどこか本人にはわからないし、早く向こうへ行きたいのでよいかげんに「うん」と返事をして逃げ出す。



知らないうちにサクラにされていたというようなことがある。

おもしろい口上はもちろん、バナナの叩き売りもなくなって、店の人も黙ってながめていることが多い。ところがわたしが植木のところを歩いていると、店の人が誰かに「やあ久し振りやなあ、あんたちちょっと変らへんなあ」と声をかけた。言われた人がきょとんとしているので、店の人は「いや、わしはあんたのこと知らんにゃ、知らんけど、わし、誰にでもそう言うてるんや」と言った。それでも相手は解せない顔をしているので、植木売りの人は何度も言いわけをしていた。じょうだんも通じないとしらけるが、自分に関係のない人達はおもしろそうな顔をして見ている。

そういえばいつだったか、すこし前の縁日に、わたしはいつものように、まず境内にある、天神さんの本地仏十一面観世音が祀ってあるという、東向観音寺に入ってお線香をあげた。それから門を出るときに、そこに立って托鉢しているお坊さんの鉄鉢に、いくらかのお布施を入れた。そのまま行こうとすると、お坊さんがわたしの肩をつかんでくるっと後ろを向かせ、錫を振って肩にあてながらご祈禱を始められた。そういうことは知らなかったのですが、驚いてどうしようかと思ったが、逃げ出すわけにもゆかないので、仕方なくわけ知り顔ですまして立っていた。終わってお札をして大急ぎでそこを離れたが、いいかげんな行ないをするものではないと思いついた。それ以後そのお坊さんを見たことがない。

もっと昔、延宝から天和の時代、一六七〇年代にあたるが、露の五郎兵衛という人がこの境内で小ばなしをして大勢の人を笑わせていたというし、それより百年ちかく前には出雲阿国がここで小屋掛けをして、歌舞伎おど



りをしたそうである。今は、ふだんの境内はひっそりしていて、修学旅行の高校生などが六人ほどのグループで学問の神様にお参りに来る姿が目立っている。しかし境内から御前通りをへだてたすぐ東側に、上七軒歌舞練場があつて、舞妓さんや芸妓さんが芸事の練習に励み、一般の人にも北野舞踊学校として、三味線やおはやし、長唄、小唄を教えているようである。春には毎年ここで「北野をどり」という、上七軒の芸妓さん達の踊りの発表会が開かれる。

わたしは骨董屋を眺めてから、そのはずれの店で、鳥の形をしたペルーの土笛を二個買った。メードインペルーと書いてあつて、たしかに異様な感じのするもので、掌に入るような小さいものだけれど、穴が六こあいていて、オカリナに似た構造である。

そこからもう一度、境内を横切つて西側まで行き、苗ものを売っているところを歩いた。老夫婦が立っている店で立ちどまったら、おじいさんがどういうつもりか、これがスイカ、これがキュウリ、これはナスビ、ナンパ、カボチャ、トウガラシ、マクワウリ、アサガオ、コスモス、ヒマワリ、クジャクソウなどとみんな教えてくれた。わたしにもだいたいは見当がつくのだけれど、作るとなると、とても手におえない。わたしの目当てはニガウリだった。ニガウリの苗を一本だけ買った。

家に帰つてから、窓の下に、アサガオとフウセンカズラにまぜて、ニガウリを植えた。しっかりと根づいた頃、竹を立てて手を作ったが、ニガウリはどんどん伸びて窓の辺りまで登ってきた。もう小さな黄色い花もいくつ咲いている。

苦瓜の花の香あましかがなべて悔改めに符（かな）ふ果みのれ

原田禹雄

わたしがニガウリを買おうと思ったのはこの歌によるのだった。

沖縄の人は暑気ばらいにニガウリを食べるとテレビで言っていた。このニガウリがみのったら、油いためにしてわが家でも暑気ばらいをしたいと思っっている。

奉 仏 皇 帝 （中国の詩人と仏教 三二）

1993 06 21 原 田 憲 雄

梁の武帝は、南朝の皇帝としてはめずらしく儒教を尊重しましたが、それはおもに国家支配の技術としてで、かれの心が道教や仏教により強くひかれていたことは「会三教」詩がうたっている通りです。五〇四年に「捨道帰仏文」（道教を捨てて仏教に帰依する宣言）を作ったとされ、五一七年に道観すなわち道教の寺院を廃し道士を還俗させたという伝えが仏教側にあるのですが、道士の陶弘景（四五二―五二三）に傾倒し大小の国事についてその吉凶を占ってもらっていた武帝の行為として、どちらも信じにくいのです。とはいえ、道教より仏教に心の傾いていったことはまちがいになく、「奉仏の皇帝」とか「倭仏の天子」といわれるのも無理からぬところです。儒教徒たちは「武帝が仏にへつらったから国を滅ぼした」と非難するのですが、そうではなく、かれは専門の仏教学者に劣らぬほど仏教に精通していたにかかわらず、個人としても皇帝としても、大切な決断を下すべきとき



に、釈尊の教えを忘れて、占いに任せたり、小さな欲望に従ったために、道をあやまり、国を滅亡に導いたので。このことは、案外、こんにちの歴史家にも忘れられているのではないでしょうか。

武帝が即位の後に仏教と関わったいちじるしいことを拾ってみると、次のようになりましょう。

即位の二年後の五〇四年、四一歳、華林園でみずから仏経を講じ、五〇六年、四三歳、外来の僧たちに經典を翻訳させています。ついでながら、五〇八年には、北インドの僧ボディールチが北魏の都の洛陽に到着し、『金剛般若経』などの翻訳を始め、五〇九年には北魏の宣武帝、二七歳、も諸僧や朝臣のために『維摩経』を講じます。南北の帝王がともに熱心な仏教徒ですが、両国の敵対関係は消滅せず、国境付近では、たえず戦争が行なわれています。

五一二年、梁の武帝は四九歳、『大品般若経』の注解五〇巻を著作し、五一四年、五一歳、尊敬していた僧宝誌が示寂したので、その墓所に開善寺を建立し、傑僧として知られる智蔵を住持とします。

この前後に、名僧たちに委嘱して經典や仏教書の目録、注釈、講義、百科事典の類いを編集させたり、仏像や塔寺をさかんに建立させます。武帝の仏教に対する熱意によるものですが、一面では北朝の魏の宣武帝の造寺造塔に負けるものかといった虚栄心に促される面もあったはずですが、その宣武帝は五一五年、三三歳で亡くなり、子の元詡（げん・く 五一〇―五二八）が六歳で即位します。孝明帝です。母親の胡氏がなかなかの女丈夫で、太后として天子の仕事を行ないます。このひとは亡夫におとらぬ熱心な仏教の信者で、五一六年、洛陽の永寧寺に、九層、高さ四〇余丈の塔を建て、ボディールチなどの訳経を援助し、魏の仏教はいよいよ盛んになります。



中国禅宗の開祖達磨大師がインドからやってきて永寧寺の塔をながめ、こんな大きな塔はインドにもないと嘆息したと伝えるのもこのころのこと。梁の武帝たるもの、負けてはいられないわけです。

五一七年、武帝、五四歳、宗廟の犠牲をやめ素饌にかえます。皇室の祖先の祭りのお供えには、鳥獸を犠牲とします。中国の先史時代からの風習らしく、儒教はもとよりこれを継承し、儒教を国教とした漢から後のすべての朝廷が従ってきたのに、仏教の殺生戒にそむくというので、やめて穀物や野菜で代用するというのです。歴史が始まって以来の伝統をひっくりかえすわけですから、たちまち非難が沸き起こりました。しかし武帝が押し通すと通り、非難する人たちでも伝統に殉じて辞職するような者はほとんどいません。これは大した決断と実行力というべきです。

五一九年、武帝、五六歳、僧の慧約から菩薩戒を受けます。帝の著作に「断酒肉文」（飲酒肉食をやめる宣言）がありますが、たぶんこの頃のものでしょう。かれはこの文によってみずから酒肉を断つことを宣言するとともに、僧尼にたいしても酒肉を断ち戒律を厳守することを求め、守られない場合には「王法によって処分しよう」といったのです。武帝の奨励によって短期間に寺院が増加しました。寺院が増加すれば、そこで奉仕すべき僧尼が必要になりますから、恣に増えたのです。僧尼が増えれば高僧も輩出しようが、高僧は短期間に養成できるものではなく、しぜん形だけの僧尼が多く、目に余ることが少なくなかったのでしょう。もっともしごくなことですから、諮問された高僧たちも反対はできません。ところが開善寺の智蔵は「ご趣旨はけっこうだが、仏教の戒律は僧尼がみずから仏に誓って実行すべきことで、帝王の法律によって統制すべきことではありません」と



反対し、しばらく時をかして自肅するのを見ていてほしい、といったので、王法による統制は見合わせました。

五二〇年、魏では侍中の元父がクーデタをおこし、胡太后を幽閉し、権力をにぎりました。この十二月、魏は梁に使いを送り、両国は初めて友好関係を結びます。ところが五二五年には、梁の軍隊が魏を攻撃し、以後また両国のあいだで戦争がくりかえされます。五二五年、魏では、四月、尚書令の元父を殺し胡太后がふたたび天子の代わりをし、六月、梁から子章王の蕭綜が亡命してきます。綜は、武帝の実子蕭統が生まれる前に養子にし、統が生まれたのでもとにかえした男です。

五二七年、武帝、六四歳。三月、同泰寺で捨身します。捨身とは、自分の身を供養として布施することです。『法華経』には薬王菩薩が身を焼いて供養したこと、『金光明経』では薩埵(さった)太子が虎に、『涅槃経』では雪山(せっせん)童子が羅刹に、捨身したことが語られています。武帝のは、一時的に帝位を降り、衣服・居処・器具などを簡素にし、三宝の奴僕として大衆に奉仕するのです。これに対し、天子がいないと困るからという名目で、群臣が大金を支払って帝を寺から買い戻します。買い戻したりせず放っておけばよいのですが、そうもできないという、きわめて形式的な、いってしまえばお芝居の捨身で、これが以後、五二九年、五四七年にもおこなわれたと伝えられます。

梁の武帝がこんなことをしている間に、魏では五二八年、胡太后が明帝を殺し、三歳の皇帝を立て、軍閥の爾朱榮(じしゅ・えい)が友人の高歡(こう・かん)にすすめられ、別の皇族を立て、胡太后と幼帝を黄河に沈めます。榮は、擁立した皇帝に殺され、そのあと榮の従子や従弟らがそれぞれ天子を立てては殺しといったことを



繰り返えし、高歓の立てた孝武帝が歓を恐れ、軍閥のひとりである宇文泰（うぶん・たい）を頼って長安に逃れ、高歓が別に孝静帝を立て、都を鄴（ぎょう）に移したことによって、北魏は二分し、鄴のほうを東魏、長安のほうを西魏といえます。五三四年で、梁の武帝は七一歳でした。

さて、高歓の部下に侯景（こう・けい）という野心家がいて、歓に言ったことがあります。「もし三万の兵をくださるなら、大江を渡って蕭衍老公をからめ取り、太平寺の坊主にしてやりますがね」蕭衍はいうまでもなく梁の武帝、太平寺は東魏の都の鄴にあった寺です。五四七年一月、高歓が死にます。歓の息子の高澄と仲のよくない侯景は、東魏での自分の位置を不安に思い、河南に拠って叛き、西魏に帰属します。ところが三月、梁にむけて、函谷以東・瑕丘以西の十三州を挙げて帰属したいと申し入れました。武帝はこれを群臣にはかります。群臣は、ここ数年、東魏と友好関係をたもってきたこと、景が信用できないことを理由に、反対しました。武帝もそのことは心配でしたが、十三州を苦勞せずに入ることが魅力で、とうとう景をうけいれ河南王に封じます。そして三月には、武帝の例の捨身供養が行なわれたのです。この年の冬、東魏は侯景を討ち、翌年一月、景は大敗して梁に救いを求めます。二月、東魏の高澄は梁に旧交を回復したいと申し入れ、書翰に「梁主と魏の先主とはともに仏教の篤信者で友好を保ってきました。現在の両国の状態はけっして梁主のご本意ではありませんまい」と記しています。武帝はこれを見て涙を流し、朝議にはかりました。和平には反対がおおく、高澄は食えない男であること、和議から予想される侯景の動きが案ぜられること、などがその理由でした。ところがこのたびも衆議を聞かず、東魏と講和することに決定しました。戦争を続けるのが嫌だったので。武帝は八五歳でした。